

中国における花器の伝統と系譜

李含（学習院大学）

中国における花器に関する研究は、実用性の視点から花器を考察するものが多く、花器自体に関する論述は極めて限られている。本発表では、中国における插花文化の伝統を整理しつつ、文献と作品の分析を通じて花器の造形性に関して再検討していきたい。

仏に花を供えることを説いている『無量寿経』は後漢時代に漢訳されており（曹魏・康僧鎧訳『仏説無量寿経』）、花を瓶に入れ、仏に供える「供花」という宗教儀礼は、おそらくそれほど時を経ずに始まったと考えられ、五世紀の南北朝時代には、『南史・齊晋安王子懋伝』に、花器に花を入れて仏に捧げる記載が見られる。

その後、隋・唐時代の詩歌、散文の中には、花と花器に関する語句が多くみられるようになり、たとえば、中唐時代の学者欧陽詹が『春盤賦』を著し、中に「事随意制、物逐情裁」とあるように、插花という行為が宗教儀式の一環から離れ、個人の心情の表れとして独立し始めていることが窺われる。更に晩唐期では、花の格に相応しい花器を取り合わせるべきだという説も登場している。羅虬が『花九錫』という著作において、「花九錫亦須蘭蕙梅蓮輩、乃可披襟。若芙蓉躑躅望仙山木野草、直惟阿爾、尚錫之云乎。」とあるように、「蘭蕙梅蓮」という類の花を王朝の重臣と見なし、これらの高貴な花に対して、与えるべき九種の器物を並べている。一方、「芙蓉」・「躑躅」は山野の草のようなもので、観賞の対象外であったと記している。

五代の陶穀の書いた『清異録』という随筆書には、「錦洞天」の條に、「李後主每春盛時、梁棟窓壁柱拱階砌並作隔筒、密挿雜花、榜曰錦洞天。」とあり、李後主は毎年仲春の頃に、天井、窓際、壁、柱、階段など至る所に竹筒を掛け、花を入れ、題榜をかかげて「錦洞天」といったという。これはおそらく中国における花の定期的な催しに関する最古の記録であろう。

宋時代に入ると、宗教は段々と日常生活の中へ溶け込み、花と花器の種類と材質も、多く変わっていく。北宋末期の文人・張邦基が『墨莊漫録』という本を書いたが、なかでは「西京牡丹聞于天下、花盛時、太守作萬花會。宴集之所、以花作屏帳、至於梁棟柱拱、悉以竹筒貯水、簪花釘掛、舉目皆花也」の一文があり、洛陽の牡丹が名高く、毎年花が満開する時、洛陽の太守が万花会を開くとある。これは明らかに前代の「錦洞天」の継承と発展だと考えられる。

一方、日本では、中世に入ると、禅僧達が寺院における供花と宋元時代の文人趣味の插花を一緒に日本に将来した。十五世紀の成立とされる『祭礼草紙』には、座敷の押板にたくさんの花入が並んだ七夕の花合わせの場面が描かれているが、これも中国における「錦洞天」にその源流があったと想定される。